断想　開高健

背　戸　逸　夫

出会いの頃

「男、東大どこへ行く」という言葉が人口に膾炙されていた、昭和44年の１月20日の新聞は、一つの時代が終焉する事件を報道した。学園紛争を象徴する全共闘運動の終焉であった。東大、安田講堂に立て篭もった全共闘学生371名に、8,500人の警官隊が、19日、34時間の攻防戦のすえ封鎖を解除、全員を逮捕した。放水とガス弾、投石に火炎ビンが交差するテレビ報道の画面はさながら戦場であった。

それは、同時に、幅を利かせていた総合雑誌の終焉でもあった。当時の総合雑誌の特徴は、誰が雑誌の巻頭論文を書くか、そのことに編集者は配慮し、巻頭論文の質によってその月の雑誌の出来具合が決まってしまうようなところがあった。学生が、いい意味で、時代のエリートとしての上昇志向、擬制志向があった。そういう時代に私は編集者になった。その風潮は、右手に朝日ジャーナル、左手に平凡パンチという言葉に象徴された。いまは無くなってしまったが、ともに週刊誌として、前者は硬派な時事解説・評論雑誌として、後者は軟派の娯楽雑誌として若い人の間に人気があった。

しかし、「大学解体」を叫び、既成の権威に疑問を発した全共闘運動の終焉により、学生の間には、シラケムードが広がり、シラケ世代と呼ばれる学生が登場してくることになる。それとともに、総合雑誌の売行きが落ち始め、コミックやノンフィクションというジャンルが出版界の主流となっていく。

私が編集者になり、開高さんにあったのは、そういう時代であった。私自身にも学生運動の余薀が濃くあった。

『輝ける闇』

偶然に書店で『輝ける闇』を手にして読んだのが発端となった。開高健、という名前は知ってはいたけれど、当時、現代小説について関心を失っていて、小説は作りものであっても少しもかまわないけれども、作りものならそれなりに読者を納得させてくれるところがほしいと考え、もっぱら、ロシアの古典文学を読んでいた。

『輝ける闇』を手にしたのは、「輝ける」と「闇」という矛盾した書名のせいでもあった。買って、すぐ近くの喫茶店に入り、任意にページを開き読み始め、とまらなくなってしまった。冒頭近くの次のような一節。

「あやふやな中立にしがみついて自分一人はなんとか手をよごすまいとするお上品で気弱なインテリ気質にどこまでもあとをつけられている自分に嘲笑をおぼえたのだ……」という一節を眼にしたとき、弾かれたように、１ページ目に戻り一気に読了した。そして、あろうことか、感想文を開高さんのもとに送りつけた。

これが、開高さんとの出会いに繋がった。

同じ時期、三島由紀夫にも手紙を書いている。こちらは時代の寵児であったし、若い編集者にとっては高みの存在であった。すでに、ノーベル賞の受賞は間違いない、といった臆測もあり、学生運動に関して積極的な発言を新聞、雑誌に発表し、目覚しい活躍であった。

手紙をだした一つのきっかけは、図書新聞で、文藝評論家の古林尚と三島由紀夫との対談を読んだことによる。古林の問いかけに三島は「……敵というのは、政府であり、自民党であり、戦後体制の全部

ですよ。社会党も共産党も含まれています。ぼくにとっては、共産党と自民党とは同じものですからね。まったく同じものです、どちらも偽善の象徴ですから。ぼくは、この連中の手にはぜったい乗りません。いまに見ていてください。ぼくがどういうことをやるか」という発言に、古林は「どうもよくわかりませんが、まあ見ている以外にないようですね」と答えている。この発言をノートに書きとめていたことによる。手帳には、昭和45年、とだけ記してこの部分のみを書き写している。この記述に間違いなければ、同年の11月25日に、「日本を真姿にして死ぬ」という檄文をまいて、市ヶ谷・自衛隊の基地で三島は、割腹自殺することになる。その少し前、三島由紀夫と高橋和巳との対談が編集者としての最初の出発ともなった。三島には、気後れし、何度も受話器をとりつつ、また置いたりと、かなり緊張して電話をした記憶がある。

開高さんからの電話

しかし、開高さんの場合は違った。度肝を抜かれた。私の手紙がついて、恐らく、すぐであった。開高さんから電話をいただいた。

「開高です。読んだ。ありがとう。遊びにおいで」

大きい声であった。それが発端となった。全く偶然の発端といっていい。しかし、大きな発端となった。真っ白いキャンバスに、墨痕鮮やかな太い点がうたれた。そこからひかれる太い線に乗って、編集者としての自分が育まれていったように思う。偶然なんてものは、宇宙線のようにたえず身辺に降り注いでいるものだろう。「時の氏神」の粋なはからいであった。昭和44年の暮れのことである。

電話をいただいて数日後、杉並区の井荻のお宅に伺った。井荻駅前のクリーニング店で、道順をたずねたが、店主は、さて、このあたりに開高健という作家はいただろうか、と訝った。アイロンの手を休めず、奥さんに大声で訊ねる姿がいまだ印象に残る。当時、書店の文庫の棚には開高さんの本は一冊しかなかった時代である。

約束の午後１時、開高さんは、玄関の扉を開けて待っておられた。玄関を入りすぐ右手にあった応接間に通されたが、私の脱いだ靴をすぐにはけるように揃えられた。これは後年まで変わらぬ開高さんの仕種であった。そのときの話の仔細は記憶にないが、濁り酒として名のとおっている「月の桂」を、オンザロックで一升半空けた。６時に辞したのだが、帰り際、また遊びにおいで、という言葉は面接試験に受かったように心が舞い立ち、一気に酔いが回ったのか、家に辿り着くまで前後不覚の態であった。

「あわれ」と「ごぞんじ」

翌日、「あわれな開高です」と電話がきたときは、また驚いた。以後、電話の出だしはこのフレーズか「よれよれ」、そして、手紙の末尾は、「ごぞんじ」であった。

私の勝手な思い込みでは、このとき、「開高学校」の生徒となることを認知されたのだろう。いま、手帳を繰ってみると、頻繁な月では週に一度、少なくても月に三度は会っている。まず、朝、電話がある。きまって「銭、にぎりしめておいで」。これが常套句であった。待ち合わせ場所は、当時、京橋にあったサントリーの広告代理店「サン・アド」で、毎度のことであったが、定刻の時間にはすでにロビーの椅子に掛けて待っておられた。

その後は、「つるや」という釣具店に寄ったり、寿司、中華、トンカツ屋などそのときそのときで場所は違ったが、私が支払った記憶はほとんどない。食事のおりの話題も多岐にわたっていた。いま、思い起こしてみると、かすかなサインをキャッチする能力、微妙な直感といったことを試され、鍛えられていたのだろう。私は、全身を耳にして聴いた。

連載『白いページ』の発端

その年の暮れ、昭和45年の秋、初めてお会いしてほぼ１年。記憶間違いでなければ、東京會舘でサントリーリザーブの試飲会があり、そこに呼ばれた。帰りのおみやげが、リザーブと木の箱に入ったグラス、それと、開高健編集の洋酒豆天国全巻セットであった。豆天国を入れる本棚もついていた。

その会場であった。連載をやろうか、という提案が突然になされた。全体のタイトルは「白いページ」とし、毎回のタイトルは動詞にする。期間は一年間、最終回は「ピリオドを打つ」にしよう、と矢継ぎ早であった。

都内某所、それも八丈島を出発してまっしぐらに南下すること25時間、海面図では、水面上100メートルの岩礁がある、この岩礁の下は3,181メートルもある、従って、この岩礁は、3,000メートルを超える山の最頂部だと説明を受けた。正式には「孀婦島」とも「孀婦岩」とも呼ばれ、孀婦とは寡婦のことだと。水割りを啜りつつ、最後に「どやネ」――

これが、後年、『完本　白いページ』として纏まることになった連載エッセイ開始の発端である。小笠原が返還される前のことであったから、行政区分でいえば、東京都の最南端の島ということになる。その島まで一緒に行こう、それを書いて連載の打ち止めにしようという提案であった。太平洋の真ん中にポツンと立つ岩礁、なるほど、東京都のピリオドか、それをもって連載のピリオドを打つ。この企みに感心した。連載が始まるまでの一年間は、実は、こまかい呼吸合わせの時間であったのであろう。

結局、１年で終わるはずのこの企画は６年半の長きに及ぶことになる。孀婦島行きは、「遂げる」という題で掲載された。顚末を話せば、八丈島から25時間かけてこの岩礁にたどり着いた。島を一周するかしないかするうち、大型の台風が発生し、間もなく岩礁海域も暴雨風圏にはいる、緊急避難せよ、という無線が入った。しかし、この直後、開高さんの釣り人生で最も大きい獲物、２メートルを超えるサワラを釣りあげた。それから、一転、逃走である。暴風に追われ、転覆の危機に何度かみまわれ、25時間かけて八丈島に着いたときは、さすがの開高さんもグッタリであった。

初めての釣りの手ほどき

初めて、開高さんに釣を教わったのは、連載間もない頃であった。時節は７月。日程は、まず、弟子屈の摩周湖でスチールヘッドという鱒を釣ることであった。この湖は永年禁猟区域だから釣は許可されていない。道庁、町役場に働きかけ放流されている鱒の生態調査という名目をつけてもらい、町役場の人も立会い、釣った魚はリリースすることが条件で許可がおりた。石ころだらけの道なき道、車が左右に大きくゆれ、一歩間違えば横転して転がり落ちそうな難所を経て、裏摩周に辿りついた。摩周湖は陥没湖である。そこから、急峻な坂を木の枝や草の蔓を頼りに下ることになる。ところが、その途中、開高さんは転倒して捻挫した。とても、自力では降りることはできない、自分はゆっくり戻るから、とそこへ座り込んでしまった。

一行は摩周湖の湖畔におりたったものの、深い霧と開高さんのことが気になり、釣どころではなかった。捻挫した開高さんは、同行の羅臼の阿部満晴さんに背負われて頂に戻った。そのあと、羅臼へ向かい、開高さんの手ほどきで幼少以来初めての釣りをすることになる。

懇切を極めた手ほどきを受けた。

井伏鱒二との対談「釣る話」のなかにつぎのような一節が出てくる。

「アラスカでも釣っているのを見ていると、私がいた川は、父が子をつれて来ているのをよく見かけた。子供が先にひっかけると、父は助けてやらない。最後まで、ああしろ、こうしろと言って、ボートを右に回したり左に回したりして、親子で声をかけながら追いかけてゆくんです。父は絶対に手を貸してやらない。自分でかけたら自分で上げろというんでしょうね。私にもああいう川と父が欲しかったと思うんですけどね、いたいけない少年時代に」

旧制中学一年のとき父を亡くし、それ以後に味わった深い孤独の経験がこの言葉には滲みでているし、何度もこの話は聞かされた。

この折、羅臼の阿部さん、辻中義一さん（現町長）たちと図って、開高さんの講演会を開こうということになった。開高さんも気持ちよく了承されたまではよかったが、さて、人が集まるかどうか、御両人はずいぶん苦労された。宣伝カーで町中に触れ回ったが、結局、用意していた大ホールから小ホールに移しての開会となった。

『新しい天体』

「白いページ」の連載中、大阪へ出かけることになった。その車中、普段は饒舌であった開高さんが、ほとんど口を開かなかった。不機嫌とも違い、ときおり笑いを漏らし、うーんと合点したり、黙って外の景色に眼を転じるといったふうであった。何かおきる予感がある。二年も揉まれてくると、鈍感な編集者でも微妙な直感は培われる。

新大阪に着く間際に、企画の提案があった。その夜、お酒を飲みつつ企画の大要を伺った。最後の一行も、出だしの一行も決まった、と。

日本の近代小説のなかでも、ほとんど類がなく、これこそ、名実ともに食をテーマにした傑作『新しい天体』誕生の瞬間であった。

この書名が、ブリアーサヴァラン『美味礼讃』の「新しい御馳走の発見は人類の幸福にとって天体の発見以上のものである」によるとは知る由もなかった。食べ物についての小説といわれれば、国木田独歩の『牛肉と馬鈴薯』であった。青年たちが自己の理想をつらぬくために、質素な馬鈴薯の食事で我慢するか、ビフテキを常食しうる生活をきずくために理想を犠牲にするか、という二者択一が、登場人物たちによって熱っぽく論じられる。現在では、なにも牛肉を食うために理想を捨てる必要はない。しかし、戦後の流砂のなかで生活に追われながらが子育てをした父の姿を目の当たりにしてきた世代である。全篇ことごとく食談の小説が成立しうるものか、訝しい思いであった。

しかし、人生いかに生くべきかという倫理の問題をテーマにしてきた文学作品にも、気がつかなかっただけで、仔細に読めば、例えば、トルストイ『アンナ・カレーニナ』の生牡蠣を食べる場面や島崎藤村『夜明け前』の食卓風景など、いま読んでも日常的懐かしさをかきたてられる食の描写はある。

この小説の連載を通して、生きるということは、まさにパンによって生きることで、そのパンの効験について具体に即して書くのも小説の不可欠な機能であることを教わった。

取材は、モツから始まった。有楽町のガード下、新橋駅前、渋谷の裏通り、新宿の区役所界隈、浅草、御茶ノ水と、夕方５時から、ただ、ひたすらモツのみを食べ歩いた。当時刊行していた週刊誌での連載ということで、取材は先行して行われたが、どこへ行っても開高さんは一切メモの類は取られなかった。編集者として、はじめて作家との同行取材である。不思議でならなかった。ある店で、ここのは旨い、といわれたとき、うまいです、としか答えようがない。物の味わい、意識の木目、身体の手触り、といったものは、わかるけれどもコミュニケートすることは難しい。手近なものはことばでは表現しにくい。一回の取材で二回分を書くという約束であったが、こんな単純な食い物であるモツ煮だけで二回も書けるのだろうか、いささか心配になってくる。

しかし、モツをテーマに書かれた原稿を読んだときの感動は忘れ難い。あの日のモツの煮えざま、香り、舌ざわり、周りの人の気配までもが、食べていたときよりも、遙かに味わい濃く、深く、精細に活写されているではないか。ほんとうに原稿のなかを風が吹きすぎてゆくようであった。舞い、ひるがえり、一瞬停止し、どっと駆け出す風のリズムが文章にあった。文章に吸い込まれていくように原稿を一読した。連載は、週一回９ヶ月間つづいたが、取材の合間や、原稿を受け取るおりの、開高さんから聞く話が楽しかった。まるで、ソーダの気泡のように、次から次へと湧きあがるアイディアの数々。御馳走よりも、開高さんの発想と眼光と気魄と話術を学びとろう、と全身を耳にした。

残された詩篇

手書きの「菜譜」が残っている。大阪の辻調理師専門学校で、開高さん招待による極上の中華料理を御馳走になった。昭和58年４月２日のことである。

長楕円形の10メートルはあろうかと思われる大テーブルに、招待客10人。その前に極上の料理が、順次整然と並ぶ。開高さんの言葉を使えば「完璧な充足」そして、「決定的で完璧な瞬間」が切れめなしに続いた。

翌日、ホテルで前日の極上料理が話題になった。

14種類でた料理、一つずつ開高さんが解きほぐしていかれる。一つ一つの料理の味について改めて教えられ、人間の生きている世界はこれほど多彩な楽しみに満ちていたのかと驚く始末であった。

『新しい天体』のときには思い到らなかったが、このとき、はじめて得心した。食についての、いや、

食ばかりでなく、開高さんの蘊蓄のいちばん大きな要素は記憶力であった。記憶力の魔物であった。それは頭脳だけでなく、舌も含めてのものであった。そして、驚くのはボキャブラリーの豊富さである。記憶力が、同時にボキャブラリーにも向かいあっている。まるで、ピンセットで頭のなかにあるボキャブラリーをつまみだしてくるようであった。人口に膾炙する詩句が、雲があとからあとから湧いては、青い空を覆うかのごとくであった。

心に通じる道は胃袋を通る（食篇）／若きの日に旅をせずば老いての日になにをか語る（青春・旅篇）／薔薇盗人は許さるべし（映画他篇）／文学は、ときにはパンではないかもしれないが、もっとしばしば酒ではあるだろう（文学篇①）／よい質問には、半ばの答えが含まれている（文学篇②）――、これは「開高健全対話集成」の帯の裏に入っている言葉である。全八巻の目次をまえにして、一瞥、速射砲のようにこの言葉が出てきた。それぞれの一言が、一冊の本全体の主題を的確に象徴している。

極上料理解説の後、三枚の詩篇をいただいた。

赤のボールペンで書かれている。あるいは訳詩であるかもしれない。

一枚目に、

二人の男が笛で“エル・コンドル・パッサ（コンドルは飛ぶ）”を吹いている。ア、

とあり、二枚目から以下の詩が続く。

私はカタツムリになるよりは
スズメになるほうがいい
そうだとも
もしなれるなら
きっと

私は釘になるよりは
ハンマーになりたい
そうだとも
もしなれるなら
きっと

船に帆かけていっちまいたいね
いつかここで見かけた白鳥みたいに
大地に縛りつけられた男
世にも悲しい声をあげている
この世で一番悲しい声を

私は町になるよりは
森になりたい
そうだとも
もしなれるなら
きっと

私は足の下に大地を感じていたい
そうだとも
もしなれるなら
きっと

開高学校の生徒として

昭和55年の夏のことであった。海外取材から帰国されて間もない時期であったと思う。そのとき、これまで、本には莫大な投資をしてこられたでしょう、ついては、本を肴に一冊に纏めませんか、と水を向けたのがきっかけで、谷沢永一、向井敏さんとの鼎談で『書斎のポ・ト・フ』という語り下ろしの一冊ができあがった。

それが機縁となった。仕事があってもなくても月に一度、茅ヶ崎のお宅に伺った。その訪問は、私にとって、一つの関門があった。部屋に通されると、「この一ヶ月間で、君が読んだ本を三冊あげなさい」が、最初の言葉となった。三冊あげると、「そのなかで、いちばん面白かった本を一冊あげ、四百字原稿用紙二枚に纏めなさい」という返事がもどってくる。枚数は時に三枚のときもあった。と、同時に開高さんは、ゴロリと横になられる。これは難儀な口頭試問であった。ともかく、しどろもどろ、二枚に

相当する感想を述べることになる。

それが、終わると、冷蔵庫から缶ビールが出てあとは雑談だが、その雑談が楽しみであった。が、一抹の不安が残る。

お嬢さんの道子さんと一緒に、ホテルで中華料理をご馳走になったことがある。本のことが話題になったとき、道子さんに「一冊の本を読んだら、面白かったか、面白くなかったか。面白かったら、どこが面白かったか、端的にいいなさい」と言われた。私が二十代の終わりのことであったが、このときの一言が、重く心にのしかかる。

それから数日後、「読んだぜ、君の目は確かや」という電話をもらったときの喜びは、なにものにもかえがたかった。電話があるかないか、合格通知を待つ心境である。精神のなかに、わずかでも糖分がなければ人間は一日も生きられない。人間は誉められれば、次はもっといい仕事をしようという気持になる。もっと面白い本を探そうというファイトが湧いてくる。お釈迦さんの手の上に乗った孫悟空である。

はからずも、毎月一度の個人レッスンとなった。この訪問がどれほどわたしの読書体験を豊富なものにしてくれたことか。

開高さんの周りには編集者のみでなく、異業種の人たちもたくさん集っていた。仔細に観察していると、開高さんを中心とした、一つの治療文化であった。相互治療の快癒文化の役割も果していたと思う。それぞれの人にとって、濃霧のなかの一点の光源の存在であったのだろう。

その存在は、知的冒険者であり、そして、親しみやすい人柄であった。セラピスト（心理療法士）であった。どこかホッとさせる物腰があった。

若い時代のことである、悲憤し絶叫したくなるような屈託を抱えて伺うことも間々あった。心の奥深いことは、言葉より顔にあらわれる。話してしまえば楽になるものだ、と開高さんに、よく見抜かれ、問わず語りで、どれほど救われたことか。その開高さんにも屈託があったに違いない。しかし、開高さんと会っていると未来への明るい希望を失わない、力強さがあった。

「あなたは生きているというだけで、多くの人の励ましです」

これは、どこかの本にあった一節を抜書きにしていたものである。光の温かみを失って、13年が経つ。

三部作になるはずであった闇のシリーズは未完成のまま終った。完成したら、書いていただく企画も二つ残った。

（編集者　せと　いつお）

余白にそえて

図書館長
山　野　博　史

平成12年11月18日、折から開催中の「生誕70周年記念 開高健展」にちなんで企画した対談「開高健を語る」のゲストとしてお招きした背戸逸夫さんに、開高健との交遊の日日について新たにご執筆願いました。

当日、背戸さんは、開高健の人と仕事をめぐって、まるで昨日のつづきのようにたのしげに、そしていかにもなつかしそうに、盛りだくさんの話題を提供してくださいました。作家と編集者がごまかしなしのがっぷり四つであった時代がよみがえり、何度も胸があつくなりました。

対談相手として聞きほれているうちに、さわやかな感じで、けれどしんみりとした調子で語られるいずれの話も、背戸さんの口からつむぎだされるやいなや、すぐさま文章にしたくなるような内容であることに気づきました。この想いは自分ひとりだけのものではあるまいと会場の気配を察知して、私は背戸さんにあつかましい無理をお願いしようとひそかにひとりぎめしたのです。

参考資料として来館者に複写を配布した、背戸さんの珠玉の掌篇「濃霧のなかの一点の光源」(『開高健全集』第16巻月報 平成５年３月５日 新潮社）とせつなく

重なりあう話を改めて耳にして、感慨を深めた聴衆も少なくないにちがいないと考えたりするとなおさら、三時間におよぶ対談がおしまいをむかえるころには、私の思いつきは決意に変わっていました。

おのれの話のひきだし方のつたなさを恥じたからでもあるのですが、背戸さんに、この際、書き下ろし原稿をおねだりしようとたくらんだわけです。たまには、敬愛する年長の編集者と攻守ところを代えても許されるのではないかなどと、虫のよいいたずら心が頭をもたげたこともあって、ぶしつけな申し出をぶつけてみたのです。

背戸さんは、当方の見えすいたわるだくみなんぞすべてお見通しのうえで、お忙しいなか、気合を入れなおして、健筆をふるわれたことが容易に見てとれる力作を届けてくださいました。対談のなかで紹介された話題がたくみに織りこまれており、話の急所がもれずに再録されているし、初おめみえの逸話にも出し惜しみをしているような筆の迷いはなく、対談を聞いた人も聞かなかった人もともに満足願える佳品を頂戴することができて、感謝にたえません。

対談の日の熱気あふれる臨場感を想い起こさせてやまぬ「断想 開高健」を寄稿していただけたうれしさに、蛇足ながら、背戸逸夫さんの玉稿を掲載するに到った事情について、書きそえました。

（法学部教授　やまの　ひろし）